

幼稚園教諭・保育士養成課程学生の「音楽表現指導法」における学び

桐原 礼

The Learning of "Instructional Methods for Music Representation" by Students in the Training Courses for Kindergarten and Nursery Teachers

Aya KIRIHARA

Abstract

The purpose of this paper is to examine the leaning of students who attended Instructional Methods for Music Representation offered at the training courses for kindergarten and nursery teachers. I examined the learning of students in classes and also their consciousness of the actual scenes where to practice the methods when classes were over.

As a result, it was clarified that in classes students were trying various measures for improvement of their own music representation and experiencing changes in their mental states. In addition, it also became evident that the individual student succeeded at having concrete opinions about children's abilities of music representation and positive influences on their mental and physical aspects while imagining being in the position to instruct music representation in the near future.

要約

本研究においては、幼稚園教諭および保育士養成課程において開講されている「音楽表現指導法」を受講している学生たちの学びについて検討することを目的とした。学生の授業時および授業最終時の教育実践現場に向けた意識について検討した。

その結果、授業において、学生は自身の音楽表現の向上を念頭に置いたさまざまな工夫や心理的側面の変化を体験していることが明らかになった。また、近い将来に音楽表現を指導する側になることをイメージしながら、子どもたちの音楽表現能力をはじめ、心理的側面や身体的側面へのプラス面の影響について、学生個々が具体的な意見を持つことができていることが明らかになった。

キーワード

音楽表現指導法、身体表現、オペレッタ、学生の学び

1 はじめに

歌う、リズムをとる、音楽に合わせて身体表現をするなど、音楽表現活動は子どもたちの生活と密接な関わりを持っている。それゆえに、幼稚園教諭や保育士として幼児と触れ合う際には、音楽表現指導を実践することが求められる。ここでは、子どもたちの生活の中に音楽が存在しているからという理由にとどまらず、音楽表現をより積極的かつ教育的に活用していくことが求められよう。

長年にわたって保育園における表現指導を継続してきた大槻は、「表現は人間を解放する」という理念のも

と、表現活動は「しなやかな強靱さ、豊かな創造性を身につけていくという、心身の開放へ向ける子どもと教師の実践の場」と述べている（大槻、1998、p.1）。音楽表現指導によって、大槻の示すような子どもたちの豊かな成長を願うからこそ、幼稚園教諭および保育士の高い音楽表現指導の能力が必要とされと考えられる。

幼児に対する音楽表現活動としては、音楽に合わせた身体表現の活動を多く取り入れることが有効であろう。神原は、音楽は快感を導くものであり、“動き”が音楽学習の原体験であると述べ、身体的な反応と情動

との関わりを指摘し、動きながら聴くなど、動きの体験を音楽理解に導く方法を提案している（神原、2009、p.10-14）。このように、幼児に対する音楽表現指導においては、身体の動きを関わらせることが重要であると言える。

本学においては、幼稚園教諭・保育士をめざす学生の必修科目として「音楽表現指導法」が設定されており、学生個々の音楽表現指導に関する能力の向上をめざしている。ここでは、長年にわたってオペレッタを実施してきており、総合表現としてのオペレッタに向けて、歌唱やリズムなどの体験とともに音楽に対応する動きの感覚を身につけながら、クラス全体で一つのオペレッタをつくり上げる体験をさせている。

筆者は、1年生3クラス（各クラス50名弱）を対象とした「音楽表現指導法」の授業を過去3年間にわたって担当してきている。本研究においては、2009年度後期の3クラスのうち1クラス（45名）を対象とし、授業において学生がどのような学びを体験しているのか、また、学生がこうした学びを教育実践現場に向けてどのように活用できるととらえているか、以上の二点について検討することを目的とした。

2 授業の概要

「音楽表現指導法」の授業計画として、筆者は、学生の「歌唱」・「リズム」・「身体表現」の3つの能力の向上を念頭に置き、最終的にはこれらを組み合わせた総合表現としてのオペレッタを完成させるという流れをとった（表1）。

第1回	優れた実践から学ぶ
第2回	歌唱、手遊び、遊び歌
第3回	
第4回	
第5回	音楽に合わせた身体表現
第6回	身体表現を活用した創作表現
第7回	
第8回	音楽に伴う多様な身体表現
第9回	ボディ・パーカッションを活用した創作表現
第10回	
第11回	
第12回	
第13回	
第14回	オペレッタ「おむすびころりん」
第15回	まとめ

表1 授業の概要

この際、音楽に対応する身体表現の感覚や、身体表現による創作活動に時間を割くことにより、オペレッタ実践においてスムーズに身体表現を活用できるよう計画した。授業で行った各内容について簡単に述べたい。

(1) 優れた実践から学ぶ

学生にとって、保育園などで音楽表現活動を実践している子どもたちの姿をみることは、本授業を受けていく上での大きなモチベーションとなるであろう。そこで第1回目の授業において、歌唱・身体表現・オペレッタなどにおいて優れた音楽表現活動を展開している、岐阜県的美濃保育園の実践に関する映像を取り上げた。

・0・1歳児：音楽に合わせて汽車になったり動物の真似をするなど、簡単な身体の動きを伴った表現の様子をみることができる。

・2歳児オペレッタ「三匹のこぶた」：保育士がセリフを読み上げ子どもたちに呼びかける中、子どもたち全員がこぶた役を演じる。

・2歳児と5歳児のリズム遊び：5歳児が2歳児とペアまたはグループになって、音楽にのって身体表現を行う。2歳児と5歳児の動きの違いがよくあらわれている。

・5歳児オペレッタ「あほろくの川だいこ」：保育士はほとんど関わらず、子どもたちだけで演じる。多様で質の高い身体表現ならびに高い歌唱能力の様子をみることができる。

(2) 歌唱、手遊び、遊び歌

幼稚園教諭および保育士にとって、歌唱は日々行われる重要な活動の一つとなる。そこで、学生の歌唱技能の向上をめざし、先に挙げた美濃保育園でよく歌われている＜機関車のうた＞（保坂純子作詞・丸山亜季作曲）、＜ファララ＞（外国曲・梶山正人訳）を取り上げた。深いブレスによる腹式呼吸を意識させるよう指導するとともに、授業の始めに毎回歌うこととした。

また、＜茶つみ＞（文部省唱歌）、＜アルプス1万尺＞（アメリカ民謡）、＜十五夜さんのもちつき＞（わらべ歌）、＜線路は続くよどこまでも＞（アメリカ民謡）などの手遊び歌、＜ビンゴ＞（外国曲）、＜幸せなら手を叩こう＞（外国曲）などの遊び歌を取り上げ、リズムにのって身体表現をすすめるための基礎とした。

(3) 音楽に合わせた身体表現

先に挙げた手遊び歌、遊び歌に合わせて、スキップ、ツーステップ、ギャロップほか、音楽にのせてステップを踏んだり、いくつかのフォーメーションを体験させた。こうした活動は、毎回授業の始めのウォーミング・アップとして最終回まで継続して行った。

(4) 身体表現を活用した創作表現

これまでに身につけた様々なステップやフォーメーションを活用および応用して、7～8人グループで創作活動すすめ、発表会にて互いの表現を鑑賞した。楽曲は、情景をイメージしやすい＜森の鍛冶屋＞（川口 落香作詞・ミヒャエリス作曲）を取り上げた。

(5) 音楽に伴うさまざまな身体表現の鑑賞

学生各自に一層自らの表現を高めたいと意識させるため、プロフェッショナルな表現について鑑賞を行った。取り上げたのは、ミュージカル「アニー」、「ストンプ」のボディ・パーカッション部分（アフリカ・ボツワナ、N.Y.、南アフリカ）である。

(6) ボディ・パーカッションを活用した創作表現

楽器がなくとも自らの身体を使って音楽表現が可能であるという点において、ボディ・パーカッションは幼児の音楽表現にも活用できるであろう。また、身体を通したリズム表現に関する新たな視点を得る機会になると考えた。＜リズムのロンド＞（カール・オルフ作曲「子どものための音楽」より）の一部を取り上げ、7～8人グループで創作活動をすすめ、発表会にて互いの表現を鑑賞した。

(7) オペレッタ「おむすびころりん」

これまでの音楽表現体験をもとに、総合表現としてオペレッタをクラス全体で実践した。教材は、幼児のためのオペレッタとして作曲された（セリフを含む）、梶山正人の作品を取り上げた。おじいさん役とねずみ役としてクラスの半分ずつに分けて演じた。この際、ほとんどの動きは筆者が指示したものだが、一部、グループにて創作表現を取り入れた。

3 調査1：授業時の学生の学び

(1) 目的と方法

身体表現を活用した創作表現およびオペレッタ実践を通して、学生がどのような体験をし、どのように感じているのか、学生の授業時の学びについて検討することを目的とした。

身体表現を活用した創作表現、オペレッタの発表会を行った後の感想（自由記述）を分析することとした。分析の際には、自由記述の中から主となるキーワードを見つけ出し、カテゴリーとしてまとめるとともに、学生の記述の抜粋を例として挙げた。この際、オペレッタ実践に関しては、先に分析する身体表現を活用した創作表現と重複が予測されたため、類似した内容は省くこととした。

(2) 結果と考察

①身体表現を活用した創作表現における学び（表2）

グループの中で話し合いながら、表現のための工夫を重ねていった学生の様子が伺える。例えば、「歌詞内容と動きを連動させた表現」を目指すことにより、見ている人にイメージが伝わるよう心がけている様子や、学生同士でさまざまな「アイディア」を出し合い、それらを一つの表現に集約しようとする営みがみられた。また、「皆でそろって表現」することを念頭に置き、グループ表現を向上させようとしていた。こうした中で、「子どもの発達段階」を意識し、子ども向けの動きを考案しようとする姿があった。

また、活動開始から発表会に至るまでに、学生の心理的側面にはさまざまな変化があったことが伺える。なかなかアイディアが出なかったり考えがまとまらない「困難」や、これらの困難を乗り越えたからこそ「達成感や喜び」を感じている。こうしたプロセスにおいて、グループ・メンバーとの「心理的距離」を縮めたり、次第に、身体表現に対する「恥ずかしさ」を軽減していったようだ。また、授業における初めての発表会であったため、人前で表現する「恥ずかしさ」や「失敗」を体験し、これらを克服していきたいとする気持ちの芽生えもみられた。学生の表現に対する消極的な気持ちは、グループでの創作表現活動および発表会

を通して、次第に積極的な姿勢へと変化していったと考えられる。

②オペレッタ実践における学び(表3)

オペレッタは、様々な要素が組み合わされた総合表現である。学生は、「ストーリー」の流れに沿って場面ごとの動きを表現することで、物語に引き込まれていった様子が伺える。このような中で、「歌・動き・セリフの一体化」の重要性とその楽しさを感じることができたようである。また、一つの作品をクラスの「皆でつくりあげていく」喜びや達成感、音楽表現活動における「子どもの立場や気持ち」を考えるような視点が生まれたことが伺える。

4 調査2：教育現場での活用に向けたとらえ方

(1) 目的と方法

学生は、将来自分が教育現場にて音楽表現指導を行う際、教える側として子どもの立場を意識する必要がある。この授業における体験を学生がどのように活用していくことができるのか、教育現場での活用に向けた学生のとらえ方について検討することを目的とした。

授業の最終回(第15回目)に、以下の質問に対する自由記述を求めた。

質問1：本講義で行った内容は、子どもたちの成長にどのように役立つと思うか。

質問2：本講義で行った内容は、幼稚園教諭や保育士となった時にどのように役立つと思うか。

この際、3つのキーワードを挙げ、それぞれについて1～2行で説明させた。分析の際には、自由記述の中から、その説明の中心となるキーワードを挙げ、カテゴリーとしてまとめるとともに、学生の記述の抜粋を例として挙げた。

(2) 結果と考察

①質問1について

授業で行ったような音楽表現活動について、子どもたちの成長にどのように関わらせることができるのか、学生からの様々な意見が出された。記述内容について、

a.表現力、b.心理的側面、c.身体的発達 の3つに分類した。

a. 表現力(表4)

子どもたちの表現力の向上に関わる事項として、「表現の楽しさ」や「演じる楽しみ」、「共に表現する楽しみ」など、音楽表現指導を通して、表現の楽しさを学ばせたいとしている。歌唱指導では、友達と共に大きな声で歌わせることによって音楽を表現する楽しみを感じさせることができる。オペレッタ指導においては、演じることによって全く違う世界にひたれるような機会をもたせることができると述べている。また身体表現に関する指導においては、自分の身体で表現する楽しさを体感させるとともに、言葉の代わりに自らの考えや気持ちを表現するツールにできることを認識している。こうした中で、子どもたちに「リズム感」などの基礎的な能力や、より表現を豊かにするための「想像力」などを身につけさせていくことができるとしている。また、音楽表現によって、子どもたちの「個性」が表出されることを予測している。

b. 心理的側面(表5)

音楽表現指導による子どもたちの心理的側面については、共に歌ったり手遊びをする際に「コミュニケーション」能力が向上することや、身体表現によって子どもたちが「自分の身体への理解」を深めたり、リズム学習において「集中力」を高められるとの意見もある。また、子どもたちがオペレッタなどを皆でつくりあげていく際の「協調性」や作品として完成させた時の「達成感や喜び」を挙げている。こうしたさまざまな表現活動は、子ども個々の「自信」につながっていくことを予測している。

c. 身体的発達(表6)

音楽表現活動は、子どもたちの「身体の発達」に大きく影響するとの意見が多く挙げられた。身体表現指導におけるステップを踏む活動は身体を大きく使う機会となるため、運動機能の発達に関わっており、手遊びは手指の発達に役立つと予測している。歌唱指導によって子どもたちが腹式呼吸を実践することができれば、肺活量の増加が見込まれ、走ったり水泳をする際にも役立てられる。また、歌唱によって語彙が増え、

言葉をスムーズに発する練習になるなど、「言語の発達」にもつながるとしている。その他、リズム感を身につければなわとびなどにも応用できるとの考えや、オペレッタにおいて役になりきってイメージすることが脳への何らかの刺激になりそうだと意見もある。

②質問2について（表7）

授業で体験した内容は、学生が音楽表現指導をする側に立った時に、どのように活用することができそうかという予測について、各指導項目に分類し検討した。「身体表現指導」については、子どもたちが自身の身体を活用して、自分たちの思いを伝えるような指導をイメージしている。また、授業における創作表現の体験は、「振りつけ指導」に結びついており、お遊戯会などで自分なりにいろいろなアイデアを生み出しながら、子どもの発達段階に合った振りつけを考案したいとする気持ちがみられる。「オペレッタ指導」では、団体で一つの表現をつくり上げる良さ、歌詞や場面に即して演じる楽しさを伝えたいとしている。その他、授業で行ったようなステップやボディ・パーカッションによる「リズム指導」、日々の生活の中で繰り返される「歌唱指導」、雰囲気づくりやコミュニケーションに活用できる「手遊びや遊び歌の指導」などがあげられた。

このような中、発声の仕方やステップをはじめとした身体表現など自己の表現技能の向上、アイデアを出す発想力、恥ずかしいという気持ちの克服など、学生自身の「自己の成長」について挙げられていた。これらは、現場に出て指導にあたる以前に、自己変革の必要性があると認識しているためであろう。

5 まとめ

本研究においては、「音楽表現指導法」の授業において、学生がどのような学びを体験しているのか、また授業終了時に、学生がこの授業における体験をどのように役立てられると考えるに至ったかについて検討した。筆者は、「音楽表現指導法」の授業目的として、第一に学生の音楽表現能力の向上、第二に学生各々に子どもたちに指導する側としての意識を持たせたいと考えてきた。

学生の音楽表現能力の向上をめざしていくために、学生の授業時の学びについて検討した結果、学生は、自分たちの表現を高めるためのさまざまな工夫を試みたり、音楽表現の良さについて自分なりの意見を持つことができていた。また、表現をつくり上げていくプロセスにおける困難や他者との関わり、達成感や喜びなど、さまざまな心理的側面の変化を体験しながら、自己の成長を認識していることが明らかになった。

授業における体験を学生がどのように教育実践現場に応用していけるのか、学生各々の「音楽表現指導」の意識については、子どもの成長に音楽表現を活用できそうだとする様々な意見が挙げられた。学生は、子どもたちのために、自分だったらどのような指導によって何ができそうかということ予測していた。ここでは、子どもたちの音楽表現の向上をはじめとして、音楽表現指導によって子どもたちの心理的側面にもはたらきかけることができると認識していた。さらには音楽表現指導が身体的発達にも様々な効果をもたらすとの意見が多く挙げられた。これらには、子どもたちの成長を願う学生の純粋な気持ちがあらわれていると思われる。

学生が今のこのような気持ちを忘れずに、教育実践現場に出た時に、少しでもこの授業が役立つことを願いたい。

今後は、「音楽表現指導法」における学生の学びについて他の角度から分析しながら、学生の音楽表現能力の向上および指導する側としての意識の持ち方について、さらに検討していきたい。

<表現の向上に関わる事項>

歌詞内容と動きを連動させる	・歌の歌詞から連想した動きを中心に踊った。これによって、みんなと同じ気持ちになり、みんなの顔をみながら、笑顔で楽しんで踊ることができたし、ただ手を動かすだけでなく、身体を使った大きな動きができた。歌詞のイメージが、見ているみんなにも伝わったら良いなと思った。
子どもの発達段階を意識した動き	・子ども向けの、覚えやすい振り付けを意識したので、とてもシンプルな動きにまとめられた。子ども特有の動きとか子どもが好きな動きを理解した上で考えなければならぬことに気づくことができました。
歌と動きをメンバーでそろえる	・簡単な動きでも、歌いながらみんなですろえるのは大変でした。できるだけメンバー皆で、歌や動きをそろえよう！と練習しました。 ・曲に合わせて皆でチーム・ワークよく動けるようがんばりました。
アイディアの楽しさ	・グループで様々なアイディアが出て、そこから1つのものを作っていくのが楽しく、喜びを感じた。また、どこの班もユニークなふりつけがあって、見てて楽しかったし、参考になりました。

<心理的側面に関わる事項>

失敗からの学び	・練習でうまくできていたのに、本番で緊張してぜんぜんうまくできなかった。とても悔しい。本番に強くなるよう、人前での発表に慣れていきたい。
メンバーの距離が近づく	・グループでの表現で、みんなと協力し合えたり、思ったことをお互い言えてよかったです。これまであまり話したことがなかった子とも一気に仲良くなれました。 ・色々なアイディアを出し合って相談しながら取り組んだことで、みんなと仲良くなれるきっかけになりました。
ネガティブな気持ちからポジティブへ	・前は創作とか身体表現とか苦手で、発表も嫌いだった。でも今回、みんなで楽しくできたから前より好きになれたし、これからはもっとちゃんとやろうと考えられるようになった。 ・身体を大きく動かしながら歌うことに抵抗する気持ちが減ったことが一番の成長だと思います。子どものように元気よく身体を動かすことは大切だし、楽しいと思います。
困難を乗り越える	・なかなか最初は意見がでなくて、ふりが決まりませんでした。皆で意見を出し合って、それをついにまとめるのは難しいと思いました。でも、苦労した分、自分たちで考えた踊りはなかなか忘れないし、踊っていてとても楽しくて、自然と笑顔になり、達成感を感じました。
恥ずかしさを乗り越える	・最初は、不安だったり恥ずかしくてできないと思っていたけれど、少しずつ恥ずかしいと思う気持ちが減っていった。自分で考えて表現することで、積極的になれたのかなと思う。
表現と気持ちの変化	・身体がリズムにのるようになってきて、前よりも楽しく歌が歌えるようになった。始めは下ばかり向いていたけど、ステップに余裕ができて指先なども気かけられるようになった。 ・スキップやステップがうまくなり、身体を動かすことが楽しいと思うようになりました。

表2 身体表現を活用した創作表現における学び

歌・動き・セリフの一体化の良さ	・歌いながら、踊りながら、セリフもあって楽しかった。この3つをすべて合わせることで、こんなに楽しいんだなあと思えました。 ・歌とおどりが一緒になっているので、歌だけよりもきれいに表現できるのだと思いました。 ・歌いながらのおどりは高度な技だし、セリフも覚えなければならぬので大変。でも、仕上がった時にとてもいいものができたと思えた。
一つの作品を皆でつくり上げる良さ	・簡単な動きだけでも、みんなで行うと一つの作品にできる。 ・セリフや踊りなどを頑張って覚えて、クラスの人々と一つのものができたので、とても楽しい気持ちになることができました。
ストーリー性の良さ	・1つの物語を表現して、自分も話の中に入っていた感じになりました。 ・場面ごとの曲に合わせて動くため、配置などいろいろ工夫が必要だったり、ストーリーに合わせて動くのも楽しかった。
子どもへの視点	・子どもたちと一緒にやったらとても楽しいだろうと思いました。他のオペレッタもやってみたいし、保育者になった時に子どもたちにも教えたいと思いました。 ・子どもにとっては、物語にひきこまれるような体験は大切だろうと思った。

表3 オペレッタ実践における学び

<表現力>

子どもの成長に 役立つ事項		指導方法	理由
表現することの 楽しさ・大切さ	表現の楽しさ	身体	自分の身体で表現することの楽しさを知ることができる。
		創作	自分たちで考える力がつき、考えることの楽しさが分かる。
		歌唱	皆と一緒に歌うことで、楽しさを味わうことができる。
			大きな声を出して歌うことは楽しいと思えるようになる。
		リズム	音楽にのことは、音楽を楽しむために大事だと思う。
			楽器を使わなくても、自分の体を使えば、いろいろな音にかわるという楽しさを知る。
			音の楽しさを知って、音楽について興味をもつことができる。
	演じる楽しみ	オペレッタ	リズム感を身につけることで、より音楽を楽しむことができると思うから。
			お話にあわせて歌うことで、より楽しいと感じられると思った。
			年齢や性別、生き物などいろいろな形でいろいろなものを演じ、全く違う世界にひたる。
			役になりきることで、楽しんで表現できる。
	共に表現する楽しみ	オペレッタ	自分で演じることによって、表現することに興味を持ってもらえたらと思う。
私自身が皆と協力して表現するのが楽しいと思えたから、子どももきっと楽しいと思う。			
歌唱			友達と大きい声で歌うことによって楽しさや気持ちよさを感じることができる。
表現の大切さ	身体	創作	少人数でもできるし、大人数でもできる。その際、友達と共に楽しむことができると思う。
		幼児期から人前で自分を表現することはとても大事。	
表現技能	表現方法を知る	身体	表現が苦手な子どももみんな楽しく体を使うことで表現することの大切さをわかってほしい。
			自分の考えや想いを伝える方法の一つを知ることができる。
			言葉で表現できない部分を身体を使って表現する。
			自分の身体を使って表現できるという方法を身につけてもらいたい。
			言葉の代わりに自分の気持ちを伝える。
	リズム感	リズム	自分自身を表現することは、自分の思いを表現できることにつながると思う。
			身体を使ってリズム感を高められる。
			スキップなどのリズム感が必要な動きが苦にならずできると思う。
			自分でリズムを作ったり、リズムに乗れるようになる。
		手遊び	歌や楽器で表現するためにも、まずリズム感を身につけさせたい。
	音楽にのってリズムを取れる練習になる。		
	個性の表出	創作	自分たちで考えて表現するのは、子どもの個性が出せて良いと思った。
			自分の考えを伝えることができる。
			自分なりの考えを積極的に言えるようになる。
			創作することで、他の人とは違った自分の個性を大事にすることができる。
	想像力	オペレッタ	歌の場面を考えることで、想像力が身につくと思う。
			役になりきって、イメージする力。
創作		皆で意見を出して何かを作ることで、また新しいアイディアや発想が生まれ楽しくなる。	
		想像力が広がり、大人では考えつかないようなアイディアを沢山出せるのではないかな。	
		自分から作るということで、想像力が養われると思った。	
考える力、想像力がつくと思う。			

表4 子どもの成長にどのように役立つか：a表現力

<心理的側面>

子どもの成長に 役立つ事項	指導方法	理由
自信	オペレッタ	人前で歌ったりセリフを言って演じるので、勇気とから度胸がついて自信につながる。
	歌唱	歌うことで自信がつく。
	創作	自分たちで決めたことを発表するような機会が大切だ。自信につながると思う。
	身体	自分を表現することによって、自信がつく。 自信をもって、積極的に表現できるようになる。
達成感と喜び	創作	自分で考え行動することで達成感が得られると思う。 自分たちでつくったものが完成したときの達成感、喜びは大きいから。
		一つの作品を保育士を子どもたちと一緒に創り上げるという達成感を喜びを感じる。
	オペレッタ	つくりあげたという達成感を感じることができる。
協調性	オペレッタ	一人のセリフもあるが、皆と一緒にだからこそ面白いと感じ、楽しさが分かる。 皆で団結して集団で協力する力。 皆で創り上げたという仲間意識を感じられると思う。 人と一緒に何かをするという楽しさを知る。
		オリジナルなものを作れるよう、皆と意見を交わしたりできるようになる。
		皆で協力することの大切さを実感できると思う。
		団体競技と同じで、一人がだらしがないと周りにも影響してしまうから、協調性を育てられる。
	創作	オリジナルなものを作れるよう、皆と意見を交わしたりできるようになる。
		皆で協力することの大切さを実感できると思う。
コミュニケーション	歌唱	子ども同士や保育者との距離が縮まると思う。 歌は誰とでも一緒に歌えるので、例えば、お年寄りと一緒にでも楽しむことができる。
	手遊び	友達同士で手遊びをすると、コミュニケーションがとれると思います。
		友達と楽しめる遊びなので、沢山の友達と関わることができるため。
集中力	リズム	実はけっこう集中しているので、集中力が身につくと思う。頭のトレーニングになる。
自分の身体 への理解	身体	身体を動かすことで、自分の身体について理解することができると思った。
		自分自身の身体の動かし方を学ぶことができそうだ。

表5 子どもの成長にどのように役立つか：b.心理的側面

<身体的発達>

子どもの成長に 役立つ事項	指導方法	理由
身体の発達	身体	ふだんは使わない部分も使うので良いと思う。 ステップを踏むことで、身体能力があがると思う。 身体を沢山動かすことになるので、体力がつく。 足腰の強化につながる。 けっこうな運動力になるので、運動能力の向上になる。 身体のような部分に気を使いながら動かすから、発達につながる。 身体を大きく使うことで、身体のコントロールを知る。 高く跳んだりステップを踏んだ中で、運動機能の発達に役立つ。
		リズム感を身につけることで身体の発達につながり、他のこと（なわとびなど）などにも役立つ。
		オペレッタ
		役にきいてイメージすることは、脳への刺激にもなると思う。
		手遊び
		小さいうちから、指先の感覚を養い、細かい動きができるようになる。 友達や先生と歌に合わせて手や指を動かすことで、手指の発達を促す。
		歌唱
		力いっぱい歌うことで腹筋もきたえられるし、声を出す機能が強化されると思う。 腹式呼吸を身につければ、歌だけでなく、走ったり泳いだりと応用できる。 腹式呼吸で思い切り歌うことで、肺活量があがる。 息を大きく吸ってはくような上手な息づかいにより、気分が良いし、肺活量が増える。
	歌唱	歌を歌うことで、言葉がスムーズに話せるようになると思います。
		歌うことで言葉を覚えられる。
言語の発達	歌唱	季節の行事などの知識が身につく。

表6 子どもの成長にどのように役立つか：c.身体的発達

幼稚園教諭・保育士養成課程学生の「音楽表現指導法」における学び 桐原

指導に役立たい事項		理由
身体表現指導	感情表現	おゆうぎ会など、言葉での表現ではなく身体で感情を表現できるので、幼児の指導にはとても役立つ。 自分の伝えたいことを、声だけでなく身体で伝えられることを教えたい。 悲しい気持ち、うれしい気持ちなど、言葉で伝えられないときでも身体で表現できることが分かった。
	発達段階に応じた動き	年齢によって出来る動きが異なることに注意しながら指導できそう。 子どもの身体の発達に目を配りながら表現指導をできそう。
	楽器の代わり	楽器が弾けない年齢の子どもの指導に役立てたい。
リズム指導	ステップ ボディ・パーカッション	園児にとっては、身体でリズムを理解したほうが良いから、自分がお手本になってステップを示す。 ステップやボディ・パーカッションなどを使ってリズム指導が出来そう。 いろいろなステップを知ることができたので、演劇会など発表会の時など、いろいろな場面で取り入れた い。
歌唱指導	歌い方や イメージ	朝の会、帰りの会、一日の活動の節目、お遊戯会など、園児の毎日の生活の流れの中に歌が多く取り入れ られているため、どのように歌うのか、どんな歌い方をすれば良いかなど、お手本を示すために役立つ。 楽しく歌える歌など、どういう歌が子どもにふさわしいか、選曲に役立つ。 季節や日常生活の歌など、いろいろな場面をイメージしながら歌うことを学んだ。
	雰囲気づくり	雰囲気を盛り上げたり、皆で“一緒に”ということを意識させたい。
手遊び 遊び歌指導	コミュニケーション	子どもたちと遊ぶ時に便利だし、子どもとのコミュニケーションにも役立てられる。 子どもとの距離を縮め、信頼感を生みだすために沢山取り入れたい。 自分が保育士になったら、友達との仲を深めるために、子どもたちと一緒にやりたいと思う。 友達と一緒に遊んで、人間関係の構築に役立てたい。 手遊びを沢山取り入れて、子ども同士や保育士との親近感を味わわせてあげられそう。
	雰囲気づくり	子どもたちの雰囲気を盛り上げたり集中させたりするときに役立つ。 歌うだけでなく、遊び歌や手遊びを取り入れることで、雰囲気を盛り上げられることを学んだ。 日常生活のちょっとした時間にもすぐできるし、子どもも覚えやすいから、沢山教えたい。
振りつけ 指導	発達段階に 応じた動き	どのような動きだったら子どもにとって覚えやすいか、動きやすいか、リズムに合うかなど考える際に役立 つ。 乳幼児にもできるような遊びのような動きを考えてみたいと思うようになった。 年齢に合った振りつけを考えなければいけないことを学んだ。
	アイデア	子どもたちの振り付けを考えるときに色々なアイデアが出せそう。自分で考えるという経験になった。 お遊戯会で劇をする時に、振りつけや動きを考える機会が多くあると思うので、とても役立つと思う。 いろいろなアイデアを出して、表現のバリエーションを増やしていきたい。 今まで自分たちで考えて創作する機会がなかったので、沢山のアイデアを知って参考になった。 先生が子どもたちに合った動きを考えなければならないから、アイデアがたくわえられた。 自分でアイデアを出して、他のクラスなどと違う表現をさせてあげたい。 想像したものをどのように表現するか考えるヒントを得た。
オペレッタ 指導	発達段階に 応じた選択	自分が保育士になったらやってみたい。年齢に合ったオペレッタについて考える際に役立つ。
	場面に 応じた表現	歌詞、場面、気持ちなど、動きで表現できることを知ったし、身体で表現する楽しさを伝えられそう。
	身体表現	保育園でオペレッタをする機会があるので、身体で表現するということを子どもたちに伝える際に役立つ。
	楽しさや 自信	団体でしか味わえない楽しさ、演じた時の喜びを味わわせてあげたい。自信を育てるためにも役立てたい。 演じる楽しさ、身体で表現する気持ちよさを伝えたい。
	アイデア	授業で体験した動きを振り返って、さらなるアイデアを出していきたい。
自己の 成長	表現技能	どのように声を出したら大きな声が出せるか分かった。 発声の仕方などを学べたので、子どもたちに教えるための自信になった。 カラオケとは全く歌い方が違うことが分かり、大きな声で歌う大切さを知った。 曲に合わせてステップをしたり、ボディ・パーカッションをしたり、自分のリズム感が向上した。 身体のどこに意識を持たせるか分かったし、ステップのレパリーを増やせた。 自分たちでアイデアを出すことで自分の発想力が豊かになった。チャレンジ精神もうまれた。 子どもの手本となるため、オーバーなくらい大きな表現が必要だとわかった。
	自信や 目標	お遊戯会などでオペレッタを取り入れたい。授業で経験したから自信を持って取り入れられそう。 恥ずかしいという気持ちを捨てて、子どもの前で表現できそう。 自分の足りないリズム感や表現について気づき、もっと高い目標ができた。 子どもたちがやってみたいと思えるよう、恥ずかしがらずに保育士が表現することが大事だと分かった。 子どもの手本となるため、オーバーなくらい大きな表現が必要だとわかった。 自分ができないことを子どもに教えることはできないから、少し自信がついた。

表7 本授業の体験をどのように活用できるか

【引用文献】

- ・大槻志津江 「子どもの心が躍るとき－表現へのこだわり－」 横須賀薫・梶山正人・松平信久 『心をひらく表現活動！遊びとともに』 東京：教育出版 1998
- ・梶山正人 「おむすびころりん」『梶山正人オペレッタ曲集 かたくりの花』 pp.20-27 東京：一莖書房 1991
- ・神原雅之（編著） 『世界の歌を遊ぶ リトミック・ゲーム 67選』 東京：明治図書 2009

【映像資料】

- ・『アニー』 コロンビア・ピクチャーズ 2004
- ・『ストンプ・オデッセイ～リズムは世界を巡る～』 GLVisual 2002
- ・『美濃保育園の歌とオペレッタ』 東京：一莖書房 2008